

紙版 ハコブネ×ブックス 冬の増刊号

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐ web サイトです。

知能にはなんら異常がないのに、読み書きが困難である**ディスレクシア**（識字障がい）はLD（学習障がい）の一つです。現代では大分、認知が進んできたものの、こうした子どもたちが周囲の無理解にさらされているケースもあります。近年、ディスレクシアの子どもたちを主人公にした**多様なバリエーションの児童文学作品**が生まれています。共通するのは、主人公である彼らが、勉強ができない落ちこぼれであり、学校では軽視され（ないしはそう思い込み）、自分で自分を下し、**自信を失っている状態**にあることです。知能に問題がないのに、何故、読み書きができないのか。当人が一番知りたいことなのに、答えはありません。物語は、それぞれ違った角度からディスレクシアの子どもの心境を見せてくれます。聡明であり、豊かなで繊細な心とバイタリティを持った彼らが、理不尽な状況を乗り越え、**再生の希望**を描く物語がここに結ばれています。

特集

ディスレクシアから見える世界



きみの存在を意識する

作者 梨屋アリエ
出版社 ポプラ社
発行 2019年8月
ISBN 978-4591163566



QRコードを読み込むとウェブサイト参照できます。

中学二年生の、ひすいは**本を読むことが苦手**です。学級担任は読書指導に熱心だけれど独善的で、ひすいのような子の気持ちは斟酌してもらえませんが、読書活動の成果は班ごとの連帯責任にされ、読めないひすいは次第に追い詰められていきます。それでも、自分が**困っている**とは口に出したくない。同じクラスの子、心算も文字の読み書きが苦手ですが、彼女は毅然と自分の障がいを主張し、先生にパソコンの使用などを**配慮**を求めます。困っているながらも、人を**困らせる子**になるわけにはいかないと考える、ひすいの心は乱れます。それぞれに生きづらさを抱えた中学生たちの、互いを見つめる視線が交錯する、多層な構造を持つ物語です。どんな子も活かされて生きる道がある。自分を**スポイルしようとする大人や社会**に対して抗う子どもたち、それぞれの精一杯なスタンスに瞠目し、意識して欲しい物語です。



丸天井の下の「ワーオ！」

作者 今井恭子
出版社 くもん出版
発行 2015年7月
ISBN 978-4774324098

review



しゃべることは誰よりも得意だけれど、文字や行が重なって見えて、読むことが困難な上、単語の意味をつかめない小学六年生のマホ。この頃のマホは**はじめの気持ち**に苛まれています。マホのディスレクシアを、親も先生も友だちも**フオロ**してしまいます。でも、自分には人に**気づかれて**いるのだと思ひ知らされることで**自尊心を失**っていたのです。夏休み、マホは「博物館」と呼ばれる丸い屋根の市民資料館で、スケッチブックを抱えて絵を描く中学生の少年、正樹と出会います。正樹にディスレクシアを気づかれないマホは、彼の**前で物語を作り**、語れることに手こたえを感じていきます。太古の世界を舞台にした遠大な物語には、マホの現在の心境と未来が語られていきます。**物語に希望を託し**、挑戦していくマホの姿がここに見えてくるのです。



ぼくとベルさん 友だちは発明王

Me & Mr. Bell.

作者 フィリップ・ロイ
翻訳者 榎田理絵
出版社 PHP 研究所
発行 2017年1月
ISBN 978-4569786230

review



ウラ面もアリマス



ディスレクシアの存在がまだ広く知られていない二〇世紀初頭。カナダのノバスコシア州の農村で暮らす少年エディは、みんなが書ける簡単な単語さえ書くことができないために、**頭が足りない子**だと思われて、父親からも**諦められて**いました。本当は賢い少年であるにも関わらず、エディは自分を卑下しがちになっていきます。地元の名士である**発明王グラハム・ベル**は、偶然知り合ったエディに知性の輝きを見いだします。ベルは、発明に必要な空想する力についてエディに教え、さらに親しい知人である**ヘレン・ケラー**を紹介し、ベルの励ましと、重い障がいを負いながらも挫けないヘレンの**賢明さや知性に**触れることで、エディはあきらめない**気持ち**を学んでいきます。やがてエディはその**優れた発想力**で、大人たちが困っている問題の**解決策**を考え出すのです。



木の中の魚

Fish in A Tree.

作者 リンダ・マラーリー・ハント
翻訳者 中井はるの
出版社 講談社
発行 2017年11月
ISBN 978-4062832441

review



文字を読んだり、書いたりすることが苦手な少女アリー。彼女には文字が反転して見え、音と綴りが違うことが理解できません。誰にも打ち明けられないまま、**作文用紙の前で途方に暮**れ、滅茶苦茶を書いて先生に叱られる毎日。新しく赴任してきたダニエルズ先生は、アリーの言動や発想から彼女が**飛び抜けた知性**を持っていることに気づき、放課後にチェスを教えることで、その才能をひきだそうと考えます。頑なに拒むアリーにも『もし木登りの能力で魚を評価したら、魚は一生自分がバカだと思いつけることになる』という先生の言葉が響きます。先生は、アリーは読むのが苦手なのではなく**学び方が他の人と違っている**のだということを学校の中で浸透させていきます。暗いトンネルに閉じ込められていたアリーに次第に差ししていく光明を感じられる物語です。

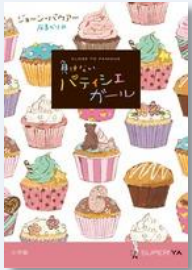
紙版「ハコブネ×ブックス」冬の増刊号 2020年2月15日発行

●発行人 きむらともお

事務系会社員。趣味で児童文学紹介サイト ハコブネ×ブックス（非営利）を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童文学評論新人賞佳作他、受賞。



@tomoostretch



負けられないパティシエガール

Close to famous.

作者 ジョーン・パウアー
翻訳者 灰島かり
出版社 小学館
発行 2013年6月
ISBN 978-4092905733



ママの愛人のDVから逃れて、偶然たどりついた町で暮らすことになった十二歳の少女フォスター。新しい学校に転校することに気が進まないのは、彼女にディスレクシアがあるからです。抜群の記憶力で学校生活を楽しんできたものの成績はいつもビリ。それでも、得意なお菓子づくりでならこの世界に立ち向かえようと自分を励ましてきました。この町で隠遁生活を送っていた元スター女優、チャリーナの家の手伝いをすることになったフォスターは、隠していたディスレクシアを彼女に見抜かれます。同じ障がい克服した経験を持つチャリーナは、読み方を教えようとするものの、これまで何度か挫折してきたフォスターの気持ちは乱れます。それでも、お菓子のレシピ本を読めるようになりたいという希望がフォスターを動かします。自分を信じて胸を張り進んでいくフォスターの姿が清々しい物語です。



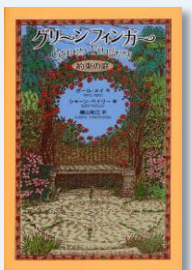
マザーランドの月

MAGGOT MOON.

作者 サリー・ガードナー
翻訳者 三辺律子
出版社 小学館
発行 2015年5月
ISBN 978-4092905764



架空の一九五九年のディスレクシアを描く歴史改変SF。純血主義と暴力的な統制により人民を支配する恐怖の統治国家マザーランド。覇を競いあう自由主義国家に先んじて、月面への有人ロケット着陸計画を進めようとするマザーランドには陰謀が渦巻いていました。辺境の地、ゾーン7に住む少年スタンディッシュは、両親を政府に連れ去られ、おじいさんと二人で暮らしています。非純血でオッドアイ、十五歳なのに読み書きができないディスレクシアのスタンディッシュは、劣等な人間であると軽んじられ、教師には虐待され、同級生にはいじめられています。が、実は機転が利き、想像力豊かな頭の良い少年でした。自分を卑下してした彼が、物語の終わりに、この恐ろしい国家体制を覆すために、勇気を奮って一石を投じる役割を果たします。理不尽な状況乗り越えていく少年の勇気が、全ての欺瞞を覆していくラストに胸を打たれます。



グリーンフィンガー

Green fingers.

作者 ポール・メイ
翻訳者 横山和江
出版社 さ・え・ら書房
発行 2009年6月
ISBN 978-4378014791



ケイトは文字の読み書きが苦手なディスレクシアであるために、学校生活をうまくやりすごすことができません。気持ちをわかってもらえないことに苛立ち、癩癩を起しては、余計、学校での立場を悪くしてしまいます。ロンドンの都会生活から離れ、田舎の村でパパと二人で新しい暮らしを始めることになったのは、問題児扱いされているケイトを新しい学校に転校させる方便だったのか。それでも、田舎の村での穏やかな生活は、ケイトの心を次第に癒していきます。引越した家は、サッカー場ほどの広大な敷地に建つ築三百年のボロ屋敷。周囲の人々の影響で、園芸に興味を持ったケイトは、この屋敷の荒れ果てた庭に再び息を吹き込む挑戦を始めます。庭の再生と呼び応ずるように傷ついた心もまた修復されていきます。芽吹きはじめた植物の生命力に、人間の魂が呼び覚まされるリアルスケールの箱庭療法です。



11をさがして

Eleven.

作者 パトリシア・ライリーギフ
翻訳者 岡本さゆり
出版社 文研出版
発行 2010年9月
ISBN 978-4580821019



サムが屋根裏部屋で偶然に見つけたのは八年前の新聞紙。そこには三歳の頃の自分の写真が載っていました。ディスレクシアのサムがかううじて読めたのは「行方不明」という言葉と自分の名前だけ。両親がおらず、祖父と二人暮らしのサムは、自分の幼少期に秘密があることを知り、調査をはじめます。サムの記憶の底にある水難事故。そして、十一という数字に抱く恐怖心。新聞記事を読んでもらうために、サムは変わり者の転校生のキャロラインに声をかけます。二人で謎を追って調査する中で記憶の断片がなくなり、恐ろしい秘密が明らかになります。転校を繰り返して、友だちを作らずに一本の世界だけを楽しみに生きてきた少女「キャロライン」が「文字を読めない少年」と一緒に謎を解き、互いの心近づけていきます。二人に生まれる友情以上の結びつきが麗しい、ミステリアスな展開と児童文学的心のバランスが絶妙な物語です。

紙版「ハコブネ×ブックス」バックナンバーのお知らせ

児童文学紹介サイト ハコブネ×ブックス の広報紙としてフリーペーパーを定期発行しています。web上にもPDF版がアップされていますので、ご覧ください。

■各号の特集

- vol.1 子どもたちには「図書館で調べる」という戦い方があります。
- vol.2 LGBTのTはトランスジェンダーのT
- vol.3 思春期にデブであるということ
- vol.4 ニューベリー賞受賞作という太鼓判
- vol.5 さまざまな病気とそれぞれの症状
- vol.6 ボーイ・ミーツ・ワールドボーイ
- vol.7 お手紙ください(メールも可)
- vol.8 物語で知るアフガニスタン
- vol.9 書庫との遭遇 社会派編
- vol.10 「あの震災」を描く児童文学の挑戦 ※鋭意制作中



2019年夏の増刊号 人気児童文学作家が伝えたい「戦争と平和」
2019年秋の増刊号 主人公は読者
2020年冬の増刊号 ディスレクシアから見える世界 ※本紙

●おまけ 絵本で読むディスレクシア



作者 パトリシア・ポラッコ
『ありがとう、フォルカー先生』
THANK YOU, MR. FALKER.
(岩崎書店 2001年12月)
『ありがとう、チュウ先生』
THE ART OF MISS CHEW.
(岩崎書店 2013年6月)

絵本の中にもディスレクシアを描いた作品が沢山あります。優れたビジュアルや少ない言葉による直接的な表現にはストレートにその痛みを感じさせられます。パトリシア・ポラッコは本人自身がディスレクシアであり、その体験から描かれた作品には、文字が読めないことで哀しい思いをしている子どもの心境が痛切に表現されています。作者の分身である主人公は、フォルカー先生、ドノバン先生、チュウ先生といった優れた先生たちにより、文字を読めない劣等感に沈んでいた気持ちを引き上げられ、新しい世界を見せられています。三十年後にフォルカー先生に再会した主人公である作者を、はじめフォルカー先生が思い出せなかったというエピソードは印象的です。フォルカー先生にとって、主人公は特別な生徒ではないのです。ごく当たり前に多くの生徒に恩恵を与え続ける教師生活が想像されます。そんな奇跡もまたあるのです。